

初恋調教

プロローグ

——今でも、時々夢に見る。
あれは、私、梨本音々が大学四年生の頃のこと。

「別れてほしいの」

告白したのは私からだった。

高校一年生で初めて会った時に一目惚れした、一つ上の男の子。

ずっと見ていることしかできなくて、彼が医学部に合格したのを機にダメ元で告白した。
彼は私の気持ちにはとづくに気づいていて、その時はさらりと流されたっけ……

のらりくらりとかわされながらも、ゆっくりと時間をかけて関係が続いて、いつしか私たちは付き合うようになった。

それなのに……いまだ大好きな人なのに、私はこうして電話で別れ話を切り出している。

「婚約者が海外転勤になったから、結婚してついでに来てほしいって言われたの。明樹くんが卒業するのはまだ先だし、研修医になったら忙しくて結婚どころじゃないよね。奨学金の返済もあって経

「済的に落ち着くまで時間もかかるんでしょう？ 私、貧乏は嫌だし、そこまで待てないから」余計なことまで口にしちゃった気がしたけれど、とにかく彼に怪しまれないようにするのに必死だった。

会って別れ話なんかできなかった。だから電話で済ませようと思った。

声が震えないように、嘘だつてバレないように、余計な追及されないように。鼻をすすると泣いているのがバレそうだから、鼻水が垂れていくのも我慢した。

『そうか……』

電話の向こうで呟いた彼の声は、こんな時でも相変わらず落ち着いている。いきなりの別れ話でも一切動じない。

ううん、忙しい中いきなり電話してきて内容がこんなので、内心呆れているのかもしれない。

『まあ、君の言う通り大学を卒業したからって僕はすぐには結婚できない。君の望みは叶えてあげられないと思う。君が向こうを選ぶなら僕は身を引くよ』

予想以上にあっさりと、彼は私からの別れ話を受け入れた。

それどころか、お嬢様育ちの私に婚約者もどきの相手がいることにさえ、気づいていたみたいだ。もし問い詰められたらどうしようと思っていたのに必要なかったよ……

「じゃ、じゃあ、さようなら」

吐きそうなほど緊張して気合いをいれて電話をしたのに、こうして別れ話は呆気なく終わった。

通話と同時に緊張の糸も一緒に切れて、私はくずおれるようにして座り込んだ。

「う……う……うわあん!!」

涙も鼻水も垂れ流しながら、私は子どものように泣きわめいた。

引き留めてほしかった。理由ぐらい聞いてほしかった（いや、聞かれたら困るけど）。少しぐらいは動揺してほしかった。

それなりに長い付き合いだったのに、こんなに呆気なく終わったことが信じられないよ。

でも、これでよかったのだと私は必死に言い聞かせた。

だって私は、もうお嬢様じゃなくなったのだ。

借金まみれで怪しい金融業者に追われる身。

父はお金の工面をしてくるからと言いつつどこかへ行ってしまったし、借金の原因になった母は入院中だし、当然、婚約者もどきだつてそそくさと逃げ去った。

怪しい金融業者は一人娘の私を追いかけまわし、あろうことか私の恋人にまで手を伸ばそうとした。

『お嬢ちゃん、借りたお金はきちんと返さないとね。借金返済ができるように仕事先は俺たちが紹介してやるよ。ああ、そういえばあなたには恋人がいたなあ。いつそ恋人にお金を工面してもらっちゃどうだい？ 紹介する仕事が嫌なら——恋人に肩代わりしてもらおうか？』

お金は一生懸命働いて返しますつて言っているのに、彼らはいつこのまにか私の恋人の存在まで把握して魔の手を伸ばそうとしていた。

そんなの、ダメだよ！

だって彼は母一人、子一人。高校も大学も奨学金で通い、学業とバイトを両立して頑張っている苦学生なのだ。そんな彼に迷惑かけたくない！

『仕事、仕事しますからっ！ 彼のところには行かないでください！』

『でもなあ……お嬢様育ちのあなたに、いかがわしい仕事ができるかい？ 恋人だって許さないんじゃないかい？』

いかがわしい仕事がどんなものかわからない。

でも、私の家庭事情のとばっちりを彼にまで受けさせるわけにはいかない。

なによりこんな惨めな現実知られたくない！

だから『彼とは別れます！ 私とは無関係の人になります！ だから、だから、彼にまで取り立てに行かないでください！ 言われた仕事はなんでもやりますからっ』と言うしかなかった。

『じゃあ、明日必ずここにおいで。そうすれば恋人には黙つといてやる』

そうして怪しげな名刺を押しつけられたのだ。

私には彼との別れを選ぶ以外、選択肢は残されていないかった。

「別れたくない……別れたくなかったよお」

だって、好きだったのだ。

ずっと片思いをしていて、やっと告白できて、運よく付き合うことができた相手なのだ。

だからもし彼と別れることがあるとすれば、振られるのは私のほうだと思っていたのに。

まさかこんなことになるなんて。

私は、その日大好きだった彼に別れを告げ、裕福なお嬢様育ちから一転、転げ落ちていったのだった。

「別れたくないよお」

そんな自分の声で目覚める朝……私の顔は大抵、あの日と同じ涙と鼻水まみれになっている。頻度は減ったけれど、いまだに未練たらしい夢を見てしまう。

夢の中の私は、底なし沼にどんどん沈んでいたり、地下牢のような場所で一人飢えていたり、見たこともない化け物に追いかけまわされたりと散々な目にあう。

でも現実の私は、いかがわしい店で働きながら借金返済に勤しんでいる——わけではなく、地獄へ転げ落ちる一歩手前で救われた。

私は桐ダンスからたとう紙を取り出すと、そつと紐を解いた。

あの日の夢を見るたびに、私はこの振袖を取り出すようにしている。

祖母が私の成人式のために準備してくれた。著名な友禪作家さんに依頼して、図柄を何度も打ち合わせて、数年がかりで制作したとても豪華な代物。

ちなみにお値段は八桁。

そしてこの振袖が、地獄へ落ちかけていた私の窮地を救った。

モチーフは伝統的な古典柄で、白生地は華やかな赤や黄にしようかと思っていたのに、祖母の一

言で深い青になった。

私にはシックな気がしたけれど、実際身に着けてみたら童顔が大人びて見えたのを覚えている。

それを着た私を見て、嬉しそうだった祖母の顔も思い出す。

そもそものきっかけは、その祖母の死だった。

会社経営をしていた祖父は意気消沈し、後を追うように病に倒れ、急遽父がその跡を継いだ。

けれど、人の好きだけが取り柄の父には、祖父のような会社経営の才能はなかったようで、私もよくわからないうちに業績悪化を理由に会社を追い出されてしまったのだ。

そこまでで終わってれば、多分まだなんとかなったのだと思う。

でも、いきなり父が無職になったせいで、お嬢様育ちだった母はショックを受けた。

お金もないのに生活レベルを落とすこともできず、ストレス発散からますます散財するようになり、気づいた時には借金まみれ。

怪しい金融業者にお金を借りていたため、借金はものすごい額になっていた。

自宅を差し押さえられ、金融業者は私にまで借金返済を迫り、いかがわしいお店で働くと脅して

きたのだ。

あの日、恋人と別れ、なにかかも失くして大号泣していた私に、かかってきたのは一本の電話。

電話をくれたのは高遠結愛ちゃん。

彼女は中高大一貫のお嬢様学校である皇華学園の二つ下の後輩。

高校時代にはあまり接点がなかったけど、大学時代に高遠家のお屋敷で開催されていたサロンで

知り合いになった。

——高遠家のお屋敷。

大企業高遠グループの創業家が所有する、歴史の趣を感じさせる海外様式の豪華なお屋敷のことだ。

祖母に連れられてお屋敷で開催されていたサロンに参加したのは、私が皇華大学三年生の夏休み。お屋敷で長年家政婦を勤めていた女性は優秀な人で、彼女に指導を受けられるならと祖母に勧められ、私は月に二回のペースで参加していた。

その時お屋敷で働いていたのが結愛ちゃんだった。

彼女が高校卒業後、大学進学もせずに高遠家のお屋敷で働いていると知った時、私は素直に『すごいなあ』と感心した。

けれど周囲は違った。

『ほら、あの子実は……』とか『皇華の出身なのにあんなに落ちぶれるなんて惨めね』なんて声が、噂に疎い私の耳にもちらほらと入ってきた。

実際は、結愛ちゃんは高遠グループの御曹司である高遠駿さんの婚約者で、彼の意向を汲んでそのご実家で、花嫁修業を兼ねてお手伝いをしていたにすぎなかつただけだ。

けれど私は祖母の死をきっかけにサロンに通うような状況ではなくなつた。

そしてあの日、久しぶりに結愛ちゃんから電話がかかつてきたのだ。

『あの、梨本さん。呉服屋さんからご自宅に連絡がつかないとお聞きしたので、梨本さんの携帯の

ほうにお電話したんですが』

その頃は、金融業者の嫌がらせの電話がうるさかつたので自宅の電話線は抜いていた。

サロンでは着付けも学べて、そこに出入りしていた呉服屋さんは我が家も最前にしていただけだつた。

『梨本さんが呉服屋さんに依頼していた振袖のお手入れが終わつたそうなんです。ご都合の良い時にお店へいらしてくださいって伝言をお預かりしたんですけど……』

それがこの振袖。

成人式の後、親族の結婚式で着たのでお手入れに出していた。ついでにと他にも数着お願いしていたのだ。

金目のものはすでに処分した後だったので、私には換金できるものももう手元にはなかつた。

お手入れに出していた振袖と数着の着物、それを売れば少しは……そう思った私は電話口で再び大号泣した。

祖母に申し訳ない気持ちと、背に腹は代えられない状況と、少しでも借金の足しになるならという希望みたいなものがないまぜになつて。

電話の向こうで、いきなり泣き出した私に彼女は慌てて、今では旦那様である高遠さんとともに私を迎えにきてくれたのだ。

『振袖を売りたい。手配してくれる呉服屋さんを紹介してほしい』と泣きながら頼む私から、結愛ちゃんと高遠さんは辛抱強くこれまでの状況を聞きだした。

そして私は藁にも縋る思いで、高遠さんにすべてを打ち明けて委ねたのだ。高遠さんは借金を肩代わりしてくれただけでなく、両親の支援までしてくれた。

祖母の形見の振袖が繋いでくれた縁のおかげで、私はいかがわしいお店で働く必要がなくなり、なんとか大学も無事卒業できた。

いろいろ片がついた頃、高遠さんからはもう身の危険はないから大丈夫だと思うよ、と言われたけれど、私はこのままお屋敷で働かせてほしいとお願ひした。

だって私はなにも知らなかった。なにもできなかった。

のほほんと親のお金で生活をして、お嬢様学校に通って、あたりまえのようにそのまま大学に進学した。

どうせすぐに結婚するかもしれないから、それまで親の会社に入るか家事手伝いをすればいいのだと、まともに就職活動さえしなかった。

大好きな恋人が大学を卒業すれば、結婚してもらえないかと思っていた。

ううん、身勝手に願っていた。

夢ばかり見て、幻想の世界にどっぷり浸かっていた。

家をなくして仕事もなくて、借金まみれになって恋人とも別れて、墮ちるところまで墮ちるしかないギリギリの状態になるまで。

お手入れに預けていたのは振袖と祖母のお気に入りの訪問着と大島紬。

そしてその呉服屋さんには、私の嫁入り道具として祖母が準備してくれていた着物が数着注文さ

れていた。

どれも素敵な着物ばかり。そして祖母の残してくれた大事な形見。

だから、私はこうして春と秋に虫干しをしてお手入れをしている。

私は祖母のお気に入りだった大島紬を肩に羽織った。

幸い私は小柄なので、祖母のものもなんとか着ることが出来る。

着物好きな祖母は『大島紬のシャリツとした感触が好きなのよ』とよく言っていた。腰紐を結ぶ時の衣擦れの音を聞かせながら。

「おばあさま。おばあさまのおかげで私、なんとか生きていますよ」

あれから三年、私は二十五歳になった。

着物にそっと触れると、私は衣桁にかけた振袖に向かって静かに両手を合わせた。

* * *

「チャペルで結婚式を挙げようと思います！」

高遠家お屋敷内にある休憩室で昼食後のティータイムを楽しんでいると、結愛ちゃんが仁王立ちになって突然叫んだ。

高遠家の若奥様となった彼女は現在、このお屋敷の運営に関するすべての責任を負う立場にある。もちろんまだ若いし経験も浅いので、周囲のサポートのもと、高遠さんからの支援や助言を受け

ながら試行錯誤で取り組んでいる。

お屋敷ではスーパ―家政婦清さん中心のサロン運営の手伝いをして、時折高遠グループ関係者であるVIPの、宿泊のお世話やおもてなしをする。

数年前に敷地内にできたレストランのオーナーも彼女だ。

レストラン経営が軌道に乗り始めると、そこで結婚式を挙げられないかという問い合わせがくるようになった。

結愛ちゃんはいばらくの間悩んでいたけれど、とりあえず敷地内にチャペルを建築することにしたらしい。

このとりあえず、がすごいんだけどね……高遠さんは損得関係なしに結愛ちゃんの希望は基本叶える方針だから。

彼女は意外にもいろいろこだわるタイプだったようで、事前にたくさん調べたうえでチャペルを設計してもらった。

自宅もレストランもすごいけど、チャペルはそれ以上のこだわりよう。

建物の大きさ自体はこぢんまりしているものの、装飾や内装がとにかく豪華。

ステンドグラス窓のデザインも凝っていて、時折見惚れてしまうぐらい。

そんなこだわり満載チャペルができあがってしばらく経つのに、一向に使用する気配がなかったから、どうするのだろうかとは思っていた。

今この場にいるのは高遠家の執事である斎藤さん、家政婦の清さん、レストラン料理長の奥さん

で使用人でもある碧さん、そして私。

私以外の人たちは基本的にお屋敷関係の仕事が中心だ。

私はお屋敷とレストランどちらの雑務も引き受けている。

お屋敷に住み込みなので、休憩時間はレストランではなくお屋敷の休憩室で過ごしていた。

「まあ、日にちが決まったの？」

碧さんが嬉しそうにほほ笑む。

たった今、結愛ちゃんのスマホに連絡が入ったようで、彼女はめずらしく興奮露わにうんうんと何度も深く頷いていた。

「お仕事の調整がようやくついたみたいなんです！ あ、でも本当にお身内だけの結婚式をつていうご希望なんですけど……」

「披露宴はレストランでやるの？」

「いいえ。披露宴というより大事な人だけをお呼びしてお食事会みたいにしてほしいんです。できればビュッフェ形式の気楽な雰囲気です。ご招待する人数も少ないようなので、お屋敷でしようかなと思っっているんですけど……ああ、でもお料理は料理長にお願いしたいです！」

「もちろん、レストランおやすみしてでもこつちを優先させるわよ」

結愛ちゃんと碧さんが嬉しそうにやりとりをする。

「チャペル第一号のお客様は結愛ちゃんのお知り合いですか？」

初めてあのチャペルで結婚式を挙げる上に、少人数のお食事会とはいえお屋敷ですると決めたの

だ。結愛ちゃんにとつて、よほど大事な人なのかなと思って聞いたところ、なぜか周囲がしんと静まり返って一斉に私を見る。

え？ なんだろう。

結愛ちゃんはうーんと首をかしげて考える。他の人たちも顔を見合わせている。

え……私、聞いちゃいけないこと聞いちゃったのかな？

そうして彼女はいいアイデアを思いついた時の表情をして、にっこり笑った。

うん、あいかわらず、かわいいなあ。

高遠さんが愛でるのもわかるよ！

「音々さん、今回はちょっと事情を抱えている方なんです。なので当日まで、できるだけ秘密にしたいと思っています。お名前は伏せてご新郎様、ご新婦様で通そうと思っんですけど構いませんか？」

(よほどのVIPなんだろうな)

お屋敷で宿泊のお客様をお迎えする時も、時々あえて名前を伏せたり仮名で対応したりしていた。最初は不思議だったけれど、高遠グループ関係者ともなれば、公にできない人たちもいるんだらうとか、このお屋敷でのルールなんだらうなど思って、これまでもすんなり受け入れてきた。

だから今回も特に問題はない。私は素直に頷く。

「他のみなさまもいいですか？」

もちろん他の人たちも頷いていた。

今の私は、世の中には様々な事情を抱えている人がいるのだということを知っている。

高遠家の奥様として幸せそうにしている彼女も複雑な事情を抱えていたし、今となつては私もそういう立場だ。

「というわけでみなさま、ご協力よろしくお願いします！」

どんな事情を抱えていたとしても、きっと結愛ちゃんにとつては特別な人なんだらうな。

それだけは、なんとなくわかった。

* * *

お屋敷に一週間滞在していたお客様をお見送りして、私は宿泊していたお部屋の掃除に向かった。今現在二階で使用できる客室は三部屋。

すべてスイートルームタイプの豪華なお部屋で、それぞれテイストが異なる。

お客さまの好みに合わせてどの部屋を使用するか決めるのは、結愛ちゃんのお仕事だ。

海外のお客様ならみんな和風がいいのかな、なんて私だっただらうけど、そう単純な話じゃない。

たとえば足腰が悪い方ならベッドや椅子があるほうがいいし、旅館によく泊まる人ならあえてモダンなお部屋を準備する。

今回のお客様はフランスの方で長期の滞在予定だったので、ご自宅のように寛いでもらうためにフレンチテイストのお部屋を用意した。

ここに宿泊するお客様はみんな上品だ。

毎朝お部屋のお掃除に入るけれど、水回り以外ほとんど汚さない。

部屋もあまり散らかさないし、外出する前には簡単に片付けてくれるお客様も多い。ベッドのシートだって軽くしわを伸ばしている。

「音々ちゃん。どこまで済んだ？」

「あ、トイレとバスルームは終わりました」

「了解」

碧さんは手際よく掃除をすすめていく。

掃除に段取りがあることや、綺麗にするコツなどを、私は碧さんに教えてもらった。

皇華も清掃活動は大事にしているから私も最低限はできたけれど、学校でみんなと一緒に分担してやるのと、広い部屋を少人数で整えるのはやっぱり違う。

「結愛ちゃんは、今日は？」

本当は結愛ちゃんじゃなくて、奥様って呼ばないといけないんだろうけれど、お屋敷の人たちが人前以外ではそう呼ぶのと、彼女本人が『奥様はやめてください！』と固辞こじしたので、下の名前で呼んでいる。

高遠さんはもちろん『旦那様』だけだ。

「しばらくは結婚式の準備に集中したいみたい。お客様の予約もしばらく入っていないし、突然入らない限り、こっちは私たちでなんとかなるしね」

「ふふ、夢中になれるものができてよかったですね」

「……うん、少しは気分が切り替わるといいんだけど」

最近の結愛ちゃんは、ずっと調子が悪かった。

仕事が忙しいのもあるけれど、一番の理由は精神的なもの。

高遠さんと結愛ちゃんは、彼女が二十歳の時に結婚した。

元々幼い頃からの婚約者同士で、彼女が二十歳になったら結婚する約束だったという、ものすごくロマンチックな関係の夫婦だ。

高遠さんがずっと海外生活で離れていたこともあって、結婚後しばらくは夫婦二人の生活を楽しんでいた。

そうして一年前ぐらいに、そろそろ子どもが欲しいねという話になったのだ。

私たちもいつ彼女が妊娠してもいいように、勤務体制をととのえていた。

結愛ちゃんは若い。

だから私たちもすぐに授かれるものだとばかり思っていた。

でも現実には、まだ彼女のもとにコウノトリは運んできてくれない。

不妊治療の開始の目安は子作りをはじめて二年だという。

二人はまだ一年だから焦る必要はない。

でも子どもが欲しい夫婦は一年できないだけで不安になる。

彼女も最初は気にしていなかったけれど、一年経ってもできなくて最近悩み始めていた。

高遠さんは、不妊治療はお互いに精神的な負担が大きいから、あまり急ぎたくないようだけれど。

彼ら夫婦は十歳の年の差がある。

結愛ちゃんは若くても、高遠さんは三十三歳——ちょうどいい年齢だ。周囲も高遠グループの跡継ぎ誕生を心待ちにしている。

そういう外からのプレッシャーが彼女を追いつめている。

そこにさらに彼女の出自しじゆが追い打ちをかけていて、周囲の音がうるさいのだ。

高遠さんは、そういう声を彼女に聞かせたくなくて、外での仕事を極力せずに済むよう調整している。

レストラン経営は順調だけれど、そのおかげでたまにいるのだ。

連れを装ってやってきて、オーナーとして挨拶する結愛ちゃんにいらぬことを吹き込むやから輩が。

「じゃあ、結愛ちゃんには結婚式に集中してもらいましょう！ 私、できることやりますよ。結愛ちゃんほど上手には無理ですけど……」

彼女は本当に二つ下とは思えないぐらいしつかりしている。そして皇華での学生生活をきちんと活かして立派に若奥様として励んでいる。

「音々ちゃんも、随分成長したわよ。水回りの掃除なんか私より上手になったし！ お料理もサロンのお手伝いも様になってきたしね」

「碧さんや結愛ちゃんのおかげです。あ、もちろん一番は清さんですけど」
そう、清さんは厳しかった。

サロン時代は私が生徒だったからか、優しい気品のあるおばさまという感じだったのに、従業員

として働きたすとそれはもうすごかった。

まあ、私があまりにもできなさすぎたせいだけだ。

「だから悩ましいのよね。音々ちゃんもそろそろ社会復帰考えたほうがいいのかなと思うのに、結愛ちゃんが妊娠したら音々ちゃんにはいてほしいし……」

碧さんは時折私に、そろそろお屋敷を出て社会を見てみないかと言ってくれる。

碧さんたちは自ら望んでここで仕事をしている。

でも私は……大波にさらわれてここに打ち上げられたようなものだからと。

「私は、お邪魔でないならここでずっと働きたいです」

「邪魔なわけではないわ。私だってずっといてほしいのよ。でも音々ちゃん……ここにはね唯一欠点があるの」

「欠点？」

住み込みだし、お給料はきちんともらえているし（一部は借金を肩代わりしてくれた高遠さんへの返済に充あてているけど）、お休みだってあるし、なにより人間関係に恵まれている。

欠点なんかむしろないんだけど。

「異性との出会いよ」

「へ？」

「駿さんがあだから、このお屋敷関係の男性って既婚者か年配者でしょう？ 警備員もレストランの厨房ちゅうぼうも配送業者まで。結愛ちゃんにはいいけど、音々ちゃんにはとぼっちりだもの」

碧さんはおしゃべりしながらも、手だけは素早く動かしている。

私も思わず止まりかけた手を、頑張って動かした。

まあ、確かに碧さんの言う通りだ。

ここで異性との出会いは望めない。

でも、望めない場所なんて職種によっては他にもたくさんありそうな気がするんだけど。

それに――

「碧さん、私異性との出会いは求めているので平気ですよ」

碧さんは私を厳しく睨んだ。

「そこが問題なんでしょう！ 音々ちゃんが異性との出会いを求めて外に積極的に出ているならいいのよ。でも、結愛ちゃん以上に、音々ちゃんは外に出ないじゃない。だったらここに異性を連れてこないとー！」

うう、碧さんが怖い。

「でも――」

「でもじゃないの。音々ちゃんは放っておくとお屋敷に骨を埋めそうなんだもの。ああ、年頃の女の子なのに心配……ここはいつそ」

手際よく掃除をしながらもぶつぶつ吹き始めた碧さんをそのままに、私は窓ふきに取りかかることにした。

(異性との出会いいかあ……)

このお屋敷に来てからは毎日過ごすのに精いっぱい、そんなこと思いもしなかった。

けれどチャペルが出来上がってからというものは、私は時折想いを馳せるようになった。

忘れたいのには――いろんな意味で忘れられない初めての恋。

高校三年生から大学四年生途中までの、人生がひっくり返る前の決して短くはない時間。

それは私が彼に夢中になっていた、私にとっては夢のような時間だった。

でも、今の私にはわかる。

夢中になっていたのは、恋に溺れていたのは私だけで、彼にとってはそうじゃなかったこと。

きつと彼にとつては私との関係なんて、そう恋でさえ――なかった。

* * *

私が彼、たちばな立花明樹くんと出会ったのは、私が高校一年生、彼が高校二年生の時だ。

皇華と唯一交流のある、名門男子校の生徒会会長――それが明樹くんだった。

一年生だった私は、当時の生徒会役員の先輩たちにとつて、からかいの対象というかマスコットというか、まあ都合のよい遣いつ走りのような存在だった。

年に何度か生徒会役員同士の交流の機会があつて、私はそこで明樹くんに一目惚れをした。いや、あの当時そんな女の子は私以外にもいっぱいいた。

副会長だった製薬会社御曹司の湯浅巧ゆあさたくみさまと人気を二分にぶんしていたから。

優しくて穏やかで落ち着いた、好青年の見本のような明樹さんと、愛想が一切ないのに強烈な存在感で魅了する巧さま（周りからそう呼ばれていた）。

二人はまるで水と油、光と影みたいだったのに仲が良かったから、一部のそういう系の女子たちにも別視点で騒がれていた。

彼らもそれは認識していて、それぞれ違うやり方で女の子たちをあしらっていた。

それに二人はいつも、年上の女子大生だとか他校の綺麗な女の子だとかと付き合っているという噂があったから、誰も彼もが見ているだけ、せいぜい周囲で騒いでいることしかできなかった。

私もそうだ。

私もずっと、見ていることしかできなかった。

私は幸い、生徒会活動というチャンスがあったけれど、それを活かせるはずもなく。

必要最小限の事務的な会話をするのみに、他の女の子よりちょっと間近で見ることができらるらい。

そのうち、実は明樹くんのおうちが母子家庭だとか、彼は奨学金であるの学校に通っているなんて情報が回り始めた。

皇華の生徒にとつてそれはマイナス要因となる。

明樹くんはますます観賞用のみの対象となり、本気で彼とお付き合いしたいと望む子は少なくなつた。

それでも告白をされていたみたいだけど、彼は『噂通り、うちは母子家庭で僕は奨学金で通つて

いる。そういう僕との交際を君のご家族は認めてくれるの？』という台詞で断るようになった。

私は明樹さんと一度だけ事務的ではない会話を交わしたことがあった。

その時、おこがましいけれど、なんとなく素の彼に触れた気がしたのだ。

そして淡い憧れだったはずの想いはそれから急激に膨らんだ。

私は、彼が高校を卒業し医学部進学が決まるのを待つて勇気を出して告白した。

当然、彼からは即座に定型句で断られた。

だから言ったのだ。

『立花先輩のおうちが母子家庭でも構わない。奨学金で通うのなんてむしろすごい！ 私は立花先輩が貧乏でも、実はすごいオタクでも、足が臭くても腹黒だったとしても、どんな先輩でも好きです！』と。

明樹くんは、ものすごく嫌そうな表情をした。

『僕はオタクじゃないし、足も臭くないし、腹黒でもないよ』と口調だけは穏やかに否定して。

私は、どんな先輩でも好きだつてことを一番に伝えたいだけだったのに、そこはスルーされて

『いえ、例えば言っただけでそんなこと思ったこともないですよ』としどろもどろで言い訳する羽目になった。

『どんな僕でも好き、か……つまり僕の顔が醜くなくても、ぶくぶく太つても、バカになつても暴力はさすがに』

『ぼ……暴力はさすがに』

『そうだな、そこは言はずか』

『でも、暴力以外は大丈夫です！』

『君は——出会った時から思っていたけど……まあ、いいや』

明樹くんはとにかく呆れていた。

それにそんな風に脅してでも私の告白を断りたかったのだろう。

私はただ気持ちを伝えるのに必死で、そんなことにまで頭がまわらなかつたけど。

でも、なぜかわからないけれど明樹くんと連絡先だけは交換できた（そういう意味では生徒会という繋がりがあったのに、それまでそんな機会さえ逃していたということだ）。

それから、私たちのものすごくスローなお付き合いが始まった。

最初の一、二年は知人以上友人未満だった。

それでも私は明樹くんから呼び出されたらほいほい出ていったし、数か月放置されても耐えていた。周囲から見ればそれは、到底恋人と呼べるものではなかつただろう。

でも私は、メッセージを送れば、数日後でも返事がくるだけで浮かれたし、毎回のテスト勉強にだけはなぜか律義に付き合ってくれたから、それが健全デートだと思っていた。

誕生日やクリスマスやバレンタインにプレゼントをあげるのは私だけだったけれど、渡すためのほんの些細な時間に会ってもらえるだけで舞い上がっていた（だって明樹くんは医学部の学生でも忙しそうだったし、そのうえばイトもしていたし、経済的には苦労していると思っていたから気にしなかつた）。

それに、私の誕生日には私の欲しいものをくれたから。

一年目は手を繋いで一緒に歩いた。

二年目は頬やおでこにキスをしてもらった。

三年目に初めて唇にキスをもらえて、四年目によく肌を重ねた。

肌を重ねてからは、そういう行為の頻度が増えた。

だから、彼は私のペースに合わせてゆっくり進んでくれていたのだと——それは大事にしてくれていたからだと前向きに捉えていた。

私の人生が大変なことになって、自分から別れ話をするようになって、最初は彼をものすごく傷つけてしまったと後悔した。

あんなに大事にしてくれていたのに、私は結局彼を捨てたのだから。

——『音々はねんねだからねえ。いつまでも夢見る夢子ちゃんじゃダメよ』

友人の言葉通り私はねんねだった。

眠って夢ばかり見ていた。

夢から覚めた私は、明樹くんのお付き合いもおままごとだったのだと気づいた。

今の私は、たんなる暇つぶしで付き合ってもらっていたことや、明樹くんにとって都合のいい存在だったことを自覚している。

私にとっての初恋は、明樹くんにとってはきつと恋愛ですらなかつた。

それでも私はその夢のおかげで今を生きている。

そしてきつとこの夢を糧に未来も生きていくんだらうな。

* * *

私は本日の仕事を終えた後、少し緊張しつつお屋敷内の書斎へ向かう廊下を歩いていた。結愛ちゃんは、結婚式の準備を着々と進めている。

結婚式の司会進行をどうするかとか、生演奏をどこまで手配するかとか、飾りつけに選ぶ生花をどれにするかとか、とても楽しそうだ。

そしてお食事会のメニュー開発も料理長とともにやっている。

試食にあやかれるのは嬉しいけれど、比例するように体重が増えているのが心配。

結愛ちゃんは体型があまり変わらなそうなのに、なんで私だけ影響受けるんだらうな。

ウェディングドレスに関しては、結愛ちゃん自身も気に入っていたブランドを紹介したらしく、ご新婦様も気に入ったようだと言いで喜んで報告してくれた。

私は、彼女が楽しく式の準備に集中できるようサポートしているし、仕事上で大きなミスもしていないはず。

だからこんな風に高遠さんに呼び出される理由がわからなかった。

高遠さんはもう見るからにイケメンで素敵な旦那様だ。

年上ならではの余裕もあるし、それはそれは結愛ちゃんを溺愛している。

優しくて穏やかで、声を荒らげることなんてほとんどない（結愛ちゃん関連以外では）紳士的な王子様。

う、う……そんな恩人だけど、あまり近づきたくないタイプなんだよね。

私はドアの前でひとつ深呼吸して、気持ちを落ち着かせた。

（とりあえずなにかあったなら謝罪しよう）

「梨本です」

ドアをノックして名乗ると中から返事が返ってきて、私は書斎に入った。

お屋敷の主が代々使用してきた部屋とあって、重厚感のある豪華な設えだ。

隣にはベッドルームやバスルームも完備しているのでここで生活もできる。このお部屋は結愛ちゃんも碧さんが管理しているので、私は掃除したこともないけど。

高遠さんは机についてなにやら仕事をしていた。

帰ってきて仕事なんて本当に忙しそうだ。けれど会社で残業するよりは、お屋敷のほうが結愛ちゃんのそばにはいられる。

「ああ、座って」

ソファを示されて私は言われた通り腰をおろした。

う、沈む。

このソファがやわらかいせいか最近私の体重が増えたせいか、どっちだろう。

高遠さんも向かいのソファに座った。

「ごめんね。急に呼び出して」

「いえ」

「そんなに緊張しないで」

「はい」

無理です、緊張します！ と心の中で叫んだ。
なんでだろう。

本当に優しい口調だし、重い空気を発しているわけでもないのに、私の体が勝手に反応して固まってしまう。

「結愛の代わりにいろいろ動いてくれていて聞いて聞いた。ありがとう」

いきなり説教でなくてほっとしたけれど、油断はできない。

「いえ、結愛ちゃん……奥様の代わりにまでは無理ですが、少しでも手助けになっているならよかったです」

本当に雑用が少し増えた程度だ。

あとは結愛ちゃんに指示されて事務的なことをしているぐらい。

「いや、いいタイミングで結婚式が決まったことも、それをサポートしてくれる人がいたことも結愛にはよかったと思う。ちょっと思いつめていて……僕だけの力じゃ、どうしようもなかったから」
高遠さんは珍しく、しみじみと吐き出した。

私が思うよりも、当事者間ではいろいろあるのかもしれない。

夫婦のことだしデリケートな問題だ。

私なんか結婚さえしていないから、本当の精神的なつらさはわからないし。

「結愛ちゃん、本当に楽しそうです。もうすぐですしね」

そう、結婚式は三週間後に迫っている。

「それで、碧さんに相談されていた件について、梨本さんにいくつか確認しようと思って、今日は呼び出したんだ」

はい？

碧さんの相談内容がどうして私に関係するんだろう？

「碧さんには、君の将来のことについてどう考えているのか聞かれたんだ。このお屋敷に勤め始めて、君は休みの日もほとんど外出しないらしいね。このままだと出会いもなく年をとりかねない。本人にその気がなくとも、雇用主として誰か紹介するなり出会いの場を設けるなり考えるべきだった」

あ……思い出した。

いつかの掃除の時に、このお屋敷勤務の唯一のネックは異性との出会いがないことだと力説していた碧さんを。

「わ、私、紹介とか出会いとか求めていますん！」

「うん、でも……結婚願望がないわけじゃないだろう？ チャペルができてから君がぼんやり見つけることが多くなったらって報告を受けている」

私は思わず言葉に詰まった。

今までそんなの口にしなかったのに、どうしていきなり碧さんがそんなことを言い出して、なおかつ高遠さんにまで話をしたのか気づいた。

確かにチャペルは、乙女の夢を刺激する代物だ。

だってそれぐらい素敵なんだから。

私でなくたって、年頃の女性ならぼーっと見てしまうと思う。

「結婚願望は……いえ、というか旦那様に紹介していただくなんて恐れ多くてできません！」

結婚願望はあった。結婚は夢見ていた。

でもそれは過去の想い。

それに高遠さんからの紹介なんて、それ断れない案件になりそうで怖いよっ。

「初めて出会った時の君はぼろぼろだった。恋人に嘘をついたと傷つけたと泣きながら、おばあさまから贈られた振袖を売りたいのだと訴えた。話はかなり支離滅裂だったけれど、君はしきりに恋人にもおばあさまにも泣いて謝っていた」

高遠さんは少し困ったように眉尻を下げて、当時の私の様子を語った。

正直言えばあまり覚えていない。

それぐらい私は精神的に追いつめられて混乱していたのだと思う。

別れ話をうまくこなすので必死だったからなあ。

「それは大変ご迷惑をおかけしました」

「あの頃の君には聞けなかったけど、どうして恋人には頼れなかったの？」

高遠さんの問いに私は首をかしげる。

どういう意味で問われているのか、わからなかったからだ。

「頼ろうなんて思いませんでした。むしろ迷惑をかけないようにするには、どうすればいいかばかりを考えていたので」

「頼ろうと思わなかったってことは、恋人は年下とか学生だったってこと？」

「そうです。年下ではありませんが、彼は学生で卒業までまだ一年以上必要で……それにとても将来有望な方だったので」

母子家庭で、奨学金で頑張って医学部に行っている明樹くんには絶対に負担はかけられなかった。

それに、私は多分落ちぶれてしまったことも知られなくなかった。

だから、婚約者と結婚して海外へ行くなんて嘘をついて別れ話をしたのだ。

あの当時の私には正式ではないものの婚約者っぽい相手がいた。なにせ私の結婚は祖父の一番の関心ごとだったから。

だから高校を卒業するとすぐに、家族の集まりを通して何人かの男性を紹介された。

何度か会って交流しながら、二十歳の成人式の後、知らぬ間にお見合いをさせられて、将来的にいずれはみたいな感じの相手もなんとなくいたのだ。

明樹くんとの交際は家族にもうすうす気づかれていたけれど、大学卒業までの間ぐらいはと目こぼしされていた。

明樹くん自身も、私にそういう相手がいるらしいことには勘づいていたのだろう。

だから、私の口から婚約とか結婚とかの言葉が出ても動じなかった。

(まあ、それも後で振り返ってからわかったことだけ)

「もう、その彼のことはふっきれた？ 君は新しい出会いを受け入れられるのかな？」

「彼のことはふっきれています。でも——まだ新しい出会いは求めていません」

そうか。高遠さんは私の意思を尊重しようとしてくれてるんだ。

私がまだ過去を引きずっているかどうか。

新しい出会いを望むほど心が落ち着いたかどうかを確認したかったんだろな。

「碧さんや旦那様の心遣いは大変ありがたいのですが……今はまだ遠慮させてください。それに、その気になったら私、ちゃんと自分で探していきます」

そうだよ。

高遠さんにお願ひしたら絶対大変なことになりそうなもの。

ここは、がつんと遠慮しよう。

「そうか。ならその気になったらいつでも言うておいで。もちろん君が自分から探していくのならそれでも構わない。そのためここをやめたくなったなら、それも受け入れる」

私はびつくりして高遠さんを見た。

「でも、借金が」

「もうすぐ終わるよ」

思ってもみない言葉に、私はぽかんと口を開ける。

金融業者への借金は利子がどんどん増えてえらいことになっていた。

高遠さんがそれを立て替えてくれたので、私はお給料の一部を毎月返済に充て^あてている。その返済額だとあと数年はかかるはず。もうすぐ終わるなんてありえない！

「嘘です！ 私の月々の返済額じゃ到底まだ無理なはずです！」

「月々の返済額だけじゃ確かに無理だね。でも僕の管理のもと、君名義で投資にまわしてきたらう。この数年できちんと増えている。だからもうすぐ終わるよ。君は自由になっていい」

いきなりそんなことを言われて混乱する。

確かに結愛ちゃんに言われてネット証券の口座を開設した。返済分はここに入金してねと指示されてその通りにしていた。結愛ちゃんというよりは斉藤さんの指示が入った時にパソコン上でいろいろ操作をさせられていたけど、まさかあれが投資だったとは気づかなかった。

借金が終わる？

私は自由になってお屋敷を出ていいの？

自由——

一見、解放感あふれる素敵な言葉なのに、私はなぜか見捨てられた気持ちになる。

お屋敷を出て一人で生きていく自分がうまく想像できない。

「梨本さん、借金はそろそろ終わる。これからどうしたいのか考える段階にきているんだ。もちろん君が返済後もこのままここで働きたいならそれでも構わない。でも、なにかやりたいことがあ

るのなら屋敷を出てもいい。君の安全はすでに保障されているし、ここに隠れ続ける必要はないんだ」

ああ、だから碧さんはあんなことを言っていたんだ。

もしかしたら、お屋敷の人たちはみんな知っているのかもしれない。

私が自分の生き方を選ぶ段階にきていることを。

私は頭がぐるぐるしそうになりながらも、とりあえず「ありがとうございます。考えてみます」となんとか適当に答えて、書斎を後にした。

* * *

なつてこつたい……つて言葉はこういう時に使うんだろうな。

私はお屋敷内に与えられた自室に戻るとベッドに突っ伏した。

お屋敷に来た時にどの部屋がいいかと聞かれて、私は『和室』と答えた。

それまでの自分の部屋が洋室だったので、違う空間に身を置きたかったのだ。

実際に与えられたのは和洋室タイプのお部屋で洋室にはベッド、畳敷スペースに桐ダンスと小さな座椅子とテーブルが置いてある。

ちよつと古めかしいレトロな雰囲気がお気に入りだ。

借金の返済まではあと数年かかると思っていた。

だからお屋敷を出るなんて考えたことがなかった。

私は、元々将来の夢なんかあまり考えてこなかったタイプ。

その手の作文にも『私には将来の夢は特にありません』から始まり『これから探していこうと思います』でいつも締めくくっていた。

だって仕事をしたいなら祖父の会社。

働きたくないならおうちで家事手伝い。

いずれ好きな人と結婚すればいいのだと思っていたからだ。

運よく明樹さんと付き合えたおかげで、彼に夢中だった私は彼の医学部卒業を待てば、そのうち結婚もしてくれるんじゃないかと期待していた。

だから彼を待つ間だけ、社会経験できたらしようかなぐらい、能天気なことしか考えていなかったのだ。

皇華は中高のカリキュラムに、裁縫、料理、掃除をはじめ、茶道、華道、着付けなどの日本文化、社交ダンス、テーブルコーディネート、英会話などマナースクールのものが多く含まれている。そのせいで良妻賢母を目指すような学校のイメージがあるけれど、実際は違う。

むしろ夫の会社が倒産しても、解雇されても支えていけるような自立心のある女性の育成を掲げていた。

だから大学になると、資格をとれる様々な学部が設置され、多くの選択肢をもてるように学部の垣根を越えて単位取得できるようになっていた。

私のような、のほほんのんびり女子はどちらかといえば少数派。

「借金が終わらなければ、ずっとここにいる理由があったのにな」

『やめてもいい、やめなくてもいい。でも君が選んでいい』

高遠さんはそう言ったけれど、考えてみれば私はいつも流されてきた。

親の言うままに皇華に進学し、与えられた生活があたりまえだと思っていた。

長期休みには海外旅行、連休には国内旅行。自宅に車は数台あったし、我が家にも執事まではいなかったけれど家政婦さんはいた。母は新作が出るたびにブランド品を買っていて、クローゼットに大量にあった。

自宅を差し押さえられる前に、いくつか質屋に持っていったけれど、買い取り価格のあまりの安さにびつくりしたぐらいだ。

限定品なんか、あんなに高かったのに。

周囲がいいと言えばやって、ダメだと言ったらやらぬ。

生徒会だつて勝手に入れられたし、お屋敷のサロンだつて祖母に言われて連れていかれただけ。

そして今回も……高遠さんや結愛ちゃんに甘えてここにいる。

ずっとずっと流れてきたから、今さら岸が上がっていいって言われても、いづどこに上がればいいのかわからない。

それに、私は明樹くんには、海外に行くのだと嘘をついて別れた。

金融業者に追われていたから、身を隠すために皇華の同級生にも同じことを伝えた。

明樹くんも友人も、私が結婚して海外で生活していると思っただけ。

それは私のちっぽけなプライドを守るためでもあった。

お屋敷を出て、もし同級生に会ったら、もし明樹くんに会ったら、私は今度はどんな嘘をつくことになるんだろう。

* * *

今日はチャペルでの初めての結婚式。

数日前から慌ただしくなって、屋敷内には珍しくたくさんの人が入り出している。

どうしても外部から人を入れないといけないので、斉藤さんからは警備員を増配していますと伝えられた。

けれど、警備員とはあからさまにわからないようにお屋敷のスタッフと同じ格好をしているから、誰が臨時の手伝いで誰が警備員なのかわからない。

とりあえずどちらだろうと、スタッフの格好をしている人には自由に指示をだしていいと言われたので、私も適当に声をかけて手伝ってもらっている。

正直に言えば、私にはみんな警備員に見えるんだけどね……

チャペルでの結婚式の参加者は親族のみだけれど、お食事会にはそれ以外にもお二人の関係者が数名参加する。

それでも全部で二十名に満たない。

一見ささやかなものを感じるけれど……すぐお金はかかっている。

今夜お屋敷には、新郎新婦と新郎両親、新婦祖父母が宿泊予定だ。

新婦祖父母と聞いた時点で、事情があるのだと言った結愛ちゃんの言葉を思い出した。

新婦にはご両親がいないのかもしれない。

世の中にはそんな人たくさんいそうだけれど、そのあたりにひっそりと結婚式おとこよめを行う理由があるのかも。

だってお金もかかっているけど、警備も嚴重な気がするもの。

結婚式やお食事会の会場準備や後片付けにはいろんな人が出入りできる。

でも本番が始まったら、会場内に入れるのはごく一部の人だけだ。そのためか、なんと高遠さん自身も今日は結愛ちゃんのそばにいて手伝いをしている。

私でさえも今日は会場内に入ることはできない。

バックヤードメインで仕事をするように言われている。

本音を言えば初めてお屋敷で実施する結婚式だから、せめてチャペル内での式のお手伝いぐらいはしてみたかった。

花嫁さんのドレス姿とか式の様子とか見たかったなああって。

私があからさまに残念そうにしていたからか、結愛ちゃんが『結婚式が終わってお屋敷に新郎新婦が移動する時はお手伝いをお願いできますか?』と命じてくれた。

花嫁さんのベールを持って誘導をサポートするお役目だ。

私は喜んで応じた。

その代わり『見たこと聞いたことは口外禁止ですよ』と念押しされた。もちろんだ。

元々、屋敷内で知りえたことは絶対口外しないという契約だっかわわしているし。

私は少し緊張しながら、チャペル外側の扉のそばで待機していた。

雲一つない秋晴れのお天気。

雨が降らなくて本当によかったと思う。気温は暑くもなければ寒くもないちょうどいい感じ。

お庭には秋バラが咲き誇り、花々の香りが風にのって届く。

チャペルからは、退場の合図でもあるピアノとバイオリンの優しい音色が流れてきた。

扉が開くと、最初に出てきたのはカメラマンだった。

私は姿勢を正して、式を終えた新郎新婦が出てくるのを待つ。そうしてささやかな拍手のもと、

二人がチャペルから出てきた。

カメラマンが「チャペル前でも撮りましょうか?」と声をかけている。

前撮りするような時間はなかったから、本人たちが希望すれば写真撮影の時間も設けるとは聞いていた。

うん！チャペル前ももちろん素敵だし、今日のお天気ならお庭での撮影もいいよ！

きつといい写真になる。

「真尋、せっかくだから撮ってもらおう」

「うん」

——え？

私は聞こえてきた花嫁さんの名前に思わず顔をあげた。

すぐさま視線を外して、無意識に結愛ちゃんを探してしまう。

彼女と目が合うと、さりげなく首を横に振って目配せされた。

私は慌てて花嫁さんのベールを綺麗に広げて整えた。繊細なレースで編まれたベールにはキラキラのスワロフスキーが飾ってある。

すぐ近くで『最初は二人きりで撮って、それから家族みんなで撮ろう』とか『お庭もいいな』とかいった二人のやりとりが聞こえた。

私は花嫁さんを知っていた。

彼女は湯浅真尋ちゃん。結愛ちゃんの仲のいいお友達で湯浅先輩——巧さまの妹。

父親の再婚によってできた巧さまの義理の妹だ。

私は高校三年生になるとすぐ、明樹くん経由で巧さまから『春から義理の妹が皇華に入学する。

注意して見てもらえないか』と頼まれた。

その時に初めて巧さまと話をしたし、恐ろしいことに連絡先まで交換した。もちろん『俺の連絡先を売ったりしたらたまたじゃおかない』と脅されたうえで。

初めて言葉をかわした時の巧さまの第一声は『ああ、君が明樹の……だったら使えるか』だった。

巧さまの命令に逆らえるはずもなく、私は義理の妹である真尋ちゃんをこっそり見守って、ついでに定期的に学校での様子を報告していた。

高等部からの入学の上、巧さまの義理の妹だと知られていた彼女は、最初こそトラブルにあっていた。

でも、巧さまが自ら送迎するほどかわいがっているという認識が定着すると、夏休みに入る頃には落ち着いた。

だから私のお役目も数か月程度で終了。

もちろん彼女はそんなこと知らない。

だからサロンで結愛ちゃんとともに彼女とも顔を合わせて挨拶をした時、皇華の先輩後輩であるという紹介はしあつたけれど、なんとなく後ろめたくてあまりおしゃべりはできなかった。

「では撮ります。お二人見つめ合ってください」

カメラマンの声に、私はベールをふわりと広げて整えると二人から離れる。

真尋ちゃんの結婚式……だから結愛ちゃんはあるなりに張り切っていたんだ。

そうして新郎様の横顔を見て、私は時間が止まった気がした。

彼女の結婚式なら当然、義理の兄である巧さまは出席しているだろうと思った。

ただどまさか彼が真尋ちゃんの隣に立っているとは想像もしていない。

だって二人は義理の兄妹。

真尋ちゃんは巧さまの三つ下で、中学を卒業したばかりの彼女にはあどけなさが残っていた。

初恋調教

巧さまに様子を見守るよう頼まれた時も、義理とはいえ妹になったから大事なんだろうと、よほどかわいがっているんだなとは思ってたけれど。

巧さまはあの頃より一段とカッコよさが増していて、大人の男性の気色と相変わらず強烈な存在感を放っていた。

同時に、きつと誰も見たことがないだろう甘い蕩けるような眼差しで真尋ちゃんを見つめていた。そのまま誰に言われたわけでもないのに、彼は真尋ちゃんに口づける。

優秀なカメラマンはシャッターチャンス逃さずに、連写の音がしつかり響いた。

「たっ、巧くん！」

「おまえがかわいすぎるのが悪い……真尋、もう一回」

「ばっ、みんないるんだよ！ 家族の前だよ！」

「だから、俺たち二人だけで式しようって言ったのに」

言い合っている間にもシャッターは切られている。

真尋ちゃんは恥じらいながらも、拒むことなく再度口づけを受け止める。絡み合う視線はどこまでも甘く、浮かぶ笑みは幸せに満ちている。

愛し愛されているのが伝わってくる。

巧さまのお父様らしき人が「巧！ いいかげんにしなさいっ」と叫んだ。

親族のお子様なのか、幼稚園か小学校低学年ぐらいの女の子が「真尋ちゃんチューしている」と言うと「子どもは見ちゃいけません」と父親らしき人が目隠ししていた。

カメラマンが「次はお庭で撮りましょうか？」とすかさず甘ったるい空気を変える。

巧さまは真尋ちゃんを抱き上げると、結愛ちゃんが誘導するほうへと歩いていった。

ドレスの裾とベールがふわりと広がった。スワロフスキーが陽の光に反射して煌めく。

優しい色の緑の木々と、色鮮やかなバラの花、真っ白なドレス、そして二人の眩い笑顔。

家族は涙ぐみながらも温かな眼差しで二人を見守っている。

二人は祝福されている。

たとえ義理の兄妹の関係であっても――

結愛ちゃんも、事情があると言つて名前を伏せてきたのも、厳重な警備体制が敷かれているのも、結婚式の参列者が親族のみで、食事が少人数なものもそのせいなのだろう。

湯浅製菓はつい数か月前、お家騒動で会社分裂！ みたいな記事が出て騒がれていた。インター

ネットサイトのニュースでもいろいろ書かれていた。

そんな中での結婚式。

きつと厳しい決断だったろうな。

だって、巧さまの立場からすると義理の妹との結婚なんて醜聞になりかねない。

それでも二人はこうして今日結婚式を挙げている。

羨ましいと素直に思った。

結愛ちゃんのそばに高遠さんが近づき、そっと肩を抱き寄せる。

羨ましい……好きな人とずっと一緒にいる約束を交わした二人が。

写真撮影を終えてお屋敷へ向かう二人の背後を、私はベールを持って歩いた。お食事会の会場まで見送った後、私はすぐさまチャペルの片付けへと戻った。なんとなく、これ以上幸せそうな二人を見ていられなかったから。

* * *

チャペル内には生花がふんだんに飾られている。

一応、お食事会が終わるまではこの状態。

今日の参加者の中に希望者がいればチャペルの見学も可能になっているのだ。

フラワーシャワーで散らばった床は片付けたほうがいいだろうと、私は箒ほうきを手にする。ステンドグラスのいろんな色が床に映って、すごく幻想的な空間になっていた。

箒ほうきでかき集めた花からもいい香りがする。このまま処分するのはもったいないなあと思ってとりあえず、水を張ったバケツにいれてみた。

祭壇側は全面ガラス張りで、高遠家ご自慢のお庭が広がっている。

ここだけ切り取るとまるで外国にでもいる気分。

私は箒ほうきで掃き終えると、今度はモップで床を磨いた。

壁際の床に光るものを見つけて手にとった。

キラキラがたくさんついた、かわいらしい髪飾り。もしかしたら参列していた小さな女の子のもの

のかもしれない。

後で誰かに預けようと、スカートのポケットにしまう。

見学者がいつ来てもいい状態にし終えて、掃除道具を片付けると私はそと祭壇に近づいた。

バージンロードは新婦の父親に手をひかれるんだっけ？

それからここに並んで、誓いの言葉をかわすんだよね。

指輪の交換が先かな、後かな？

何度か参加した結婚式を思い出す。

私もいつか誰かとここに立てる日が来るのかな。

愛を誓いたい相手と出会えるのかな。

いまだに、想像する時に私が思い浮かべてしまうのは明樹くんだ。

彼以外の人と結婚するイメージがわからない。

だから私はたぶん、ここに立つ日は来ない気がする。

——っていか明樹くんだって、もうとっくに誰かと結婚しているかもしれないよね。

だって巧さまが結婚したんだもの……

そこで、ん？ と思ったのと、扉を遠慮がちにノックする音が聞こえたのは同時だった。

「はい！」

もう見学希望者だろうか。

だって食事会始まって、そう時間たってないよ。

「すみません。こちらに髪飾りの落とし物はありませんでしたか？ 小さな女の子用でキラキラしているらしいんですが」

そう言いながら扉を開けて入ってきたのは、フォーマルスーツを着た男性だった。

私はさつき見つけたばかりの髪飾りをポケットからとり出す。

よかった、とりにきてもらえて。

「落とし物ありましたよ。こちらではありませんか？」

「ああ、僕は落とし物がなかったか見えてくれと頼まれただけなので、ちよつとわからないんですけど。だから椎名先生が探しにくればよかったのに……」

相手に近づいて、掌てのひらにのせた髪飾りを見せる。

見上げて男性と目が合った瞬間、私は固まった。

男性のほうも私同様、固まっている。

本日二度目だ……時間が止まった気がするの。

巧さまがいると気づいた時点で、私はもつと想像力を働かせるべきだった。

真尋ちゃんの結婚式を羨うらやまんでいる場合ではなかった。

だって、巧さまの結婚式ってことは——仲のいい彼が来る可能性は充分あったのだから。

「は、るきくん……」

「……ねね？ 音々か？」

私が行動を起こすより早く、髪飾りを握った手首を掴まれる。そして顔を確かめるかのように明

樹くんの手が私の頬に触れた。

巧さまもすぐくカッコよくなっていたけど、明樹くんもものすごくカッコよかった。

少し明るめの髪は、ちよつとチャラそうな雰囲気。

でも穏やかで優しそうな好青年から、落ち着いた紳士的な大人の男性になっている。

なのに目が……彼の目だけが驚愕きょうわくに見開かれ、複雑な色を滲にじませつつ強い威圧感を放っていた。

(は、明樹くん……まさか、まさかこんなところで再会するなんて!!)

「音々。なんで君がここに……この格好、ここで働いているのか？ いや、そもそもなんで日本に
くる」

「ひ……人違い」

「そんなわけないだろう！」

反射的に誤魔化そうとしたのを叱よかられる。

う、う、彼に本当は怖いところがあるって知っているのって私だけかなあ。

そのうえ明樹くんは掴んでいた私の左手をじっくり見て指輪がないことまで確認した。

仕事が素早すぎる。

「そもそも結婚して海外にいるはずの君が、どうして日本にいて働いているんだ！ 答えて音々！」
なにをどう言えればいいのだろう。

どんな嘘をつけば誤魔化されてくれるのだろう。

あの時は精神的におかしかったせいかな、必死だったせいかな、逆にするとうまい嘘をつけた気

立ち読みサンプル
はここまで

がするのに、今の私にはなんの名案も思い浮かばない。

「は、明樹くん、腕痛い」

「あ、ああ。悪い」

明樹くんの剣幕に怯えつつ告げると、彼は力を緩めてくれたものの離しはしなかった。

というか、どうしてこんなに明樹くんは怒っているんだろうか。

確かに私は嘘をついて明樹くんを振った形にはなったけど、彼は彼でけっこうあっさりしていたの。

「い、いろいろ、いろいろあってね。今はここで働いているの」

「それは結婚式関係の仕事？」

「ええと、このお屋敷での仕事」

「お屋敷って、高遠家ってこと？」

渋々頷いた。

お屋敷内で知ったことは口外禁止だけど、働いていることまで秘密にしなきゃいけないわけじゃない。ただ誰にも言う必要がなかったから言ったことがなかっただけで。

「明樹くんは、この落とし物を取りに来たんでしょ？ それに今お食事会の最中なんじゃないの？ 戻ったほうがいいと思うよ」

「……音々にしてはもったもなことを言うね。確かに椎名先生のお嬢さんが泣いているから、これは早めに届けたほうがよさそうだ。巧はどうでもいいけど、椎名先生と姫にはきちんと礼は尽くし

たい」

私は同意の意味を込めてうんうん頷いた。

「そのうえ、高遠家か……お屋敷となると君の雇い主は高遠の息子さんのほうか」

再度うんうん頷いた。

明樹くんは少しの間考え込んだ後、「会場に戻ろう」と言ってなぜか私の手を掴んだまま、お屋敷へとひっぱっていった。

「明樹くん、明樹くん！ 私チャペルでの仕事がまだあるっ！」

「今は、この敷地内で迷った僕を会場まで案内する仕事を優先すべきだ」

さすが、かしこい明樹くんだ。

立派な言い訳が成り立っている。

私に反論も抵抗もできるはずがない。

「でもでも！ 会場内には私が入っちゃいけないことになっているの！」

明樹くんは、迷うことなくチャペルからお屋敷に入り、一直線に会場へと向かっていく。明樹くんが迷うわけがないとは思っていたけど、私のほうがこうしてひっぱられていたら案内の言い訳にはならないよ。

そうして会場外の扉の前に立つと、明樹くんは再び思索して中の誰かにまず髪飾りを預けた。そのうえで、なおかつ高遠さんを廊下と呼び出した。